

島原湾におけるコウイカ漁獲量と中間潮時の関係について

山崎 正博 漁場学専攻

【目的】我が国最大の潮汐(最大6m)が見られる九州西部の有明海では、コウイカ *Sepia esculenta* がイカ籠、釣、小型機船底曳網及び刺し網等で漁獲される。なかでも本種の産卵期に当たる初春には、コウイカが海底構造物周辺に集まる習性を利用したイカ籠漁が行われる。過去の研究で、流速の速い大潮時よりも流速が減少する小潮時でコウイカの漁獲量が増加することが報告されている。潮汐による環境変動は、内湾での漁業に大きな影響を与えていることが考えられる。一方、当業者が着目する中間潮時と漁獲量の関係については明らかではない。そこで本研究では、中間潮時における上潮(月齢10~13日目と25~28日目)、下げ潮(月齢3~6日目と18~21日目)とコウイカ漁獲量の関係について検討した。

【資料】用いた資料は、長崎県深江町のイカかご漁の漁期(1月下旬から6月上旬)における1経営体のコウイカ日別漁獲量、そして深江漁業協同組合員の操業日誌(1989~1998年、2000~2002年)に記録された漁獲量である。1989~2002年までの漁期における潮汐データは海上保安庁 Online Data(J-DSS)の潮汐表を利用した。データは深江町から島原湾を通して向かい側の熊本県三角を観測ポイントとした潮高値(1時間間隔、単位cm)を用いた。最大流速は回帰式($V=10.0+0.2R$ V =最大流速(cm/sec), R =潮差(cm)) (中村他 1996)を用いて求めた。

【結果】1999年を除外し13年分のコウイカ漁獲量データから、各年度のイカかご漁の漁期における総漁獲量を求めて、漁獲量の合計が半分に達した日までを漁期の前半、当該日の翌日以降を漁期の後半として2つに分け、月齢別に整理した(図1)。前半と後半とで漁獲量に明確な違いは見られなかったが、前半において月齢15日目の大潮時で過去の研究報告とは異なる漁獲量の増加が見られた。さらにその中から上潮、下げ潮別に分けて、漁獲量と流速の関係を図2に示す。上潮、下げ潮共に最大流速が遅いほどコウイカ漁獲量増の傾向が見られた。

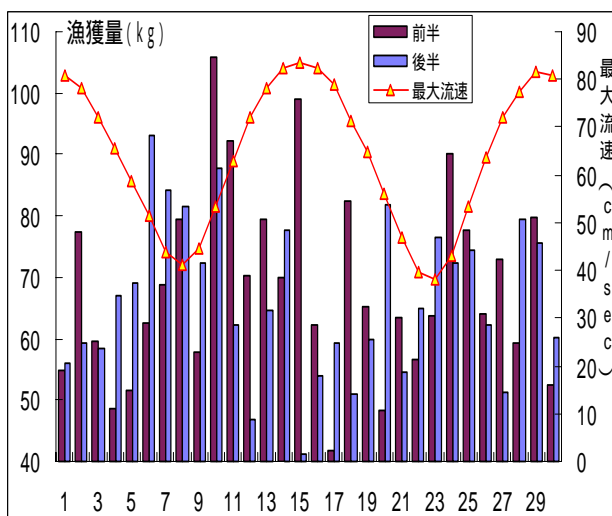


図1 月齢別平均漁獲量(kg)

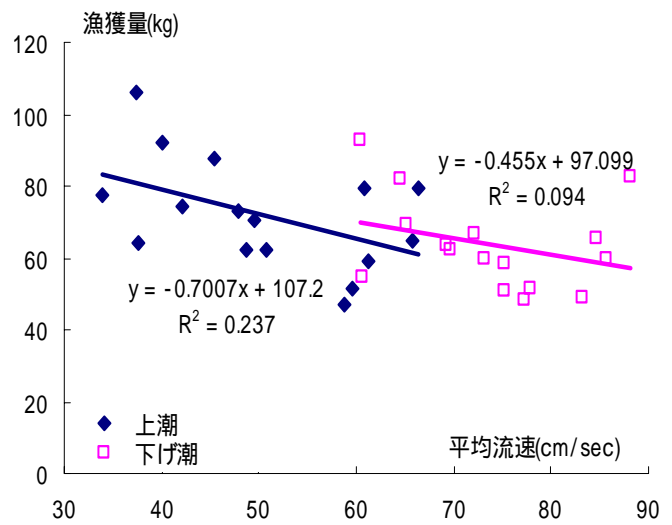


図2 漁獲量(kg)と最大流速(cm/sec)の関係